『新五代史』世家訳註稿（一）

伊藤宏明

解題

本稿で翻訳を試みる『新五代史』[一]は北宋の著名な史学者である欧陽脩（一〇〇七～七二）が著したものである。彼はまた政論家、経学者としても知られる。

一　欧陽脩の略歴

欧陽脩は真宗・景徳四年（一〇〇七）に父親の任地である綿州（四川省綿陽市）の官舎で生まれた。彼の本籍は吉州廬陵県（江西省吉安市）である。彼は四歳で父を失い、母親とともに叔父の欧陽曄を頼って任地の隨州（湖北省隨州市）に身を寄せた。しかし暮らしは貧しく、生活はきびしかった。そうした環境の中で勉学に励み、仁宗・天聖八年（一〇三〇）に二四歳で科挙に合格し、進士に挙げられ、翌年に西京留守推官に就任した。その後、欧陽脩は景祐元年（一〇三四）に館閣校勘となり、『崇文総目』の編纂に参加するが、二年後の景祐三年（一〇三六）に権知開封府の范仲淹が宰相呂夷簡の政治を批判して知饒州（江西省波陽県）に左遷されると、権力側に加担した司諫の高若訥を痛烈に批判したため、峡州夷陵県令（湖北省宜昌市）に左遷された。さらに二年後の宝元元年（一〇三八）に光化軍乾徳県令（湖北省老河口市西北）

に転任した。康定元年（一〇四〇）に中央官界に復帰して再び館閣校勘となり、『崇文総目』の編集に携わった。集賢校理、知諫院、龍図閣直学士、河北都転運按察使を歴任。慶暦五年（一〇四五）にいわゆる慶暦の党議のために杜衍・范仲淹・韓琦・富弼が相次いで職を去ったが、彼は上書して朋党をもって弁護した。しかし甥の疑獄事件に巻き込まれて、知滁州（安徽省滁州市）に左遷された。知揚州（江蘇省揚州市）、知潁州（安徽省阜陽県）を歴任し、皇祐元年（一〇四九）に中央に戻り、礼部郎中、龍図閣直学士、南京留守を歴任するが、同四年（一〇五二）母の死去に伴い職を離れた。至和元年（一〇五四）に『唐書』編纂を命ぜられ、翰林学士兼史館修撰となり、六年後の嘉祐五年（一〇六〇）に『唐書』二五〇巻を完成させ、礼部侍郎、翰林侍読学士となった。枢密副使を経て、翌年戸部侍郎・参知政事となり、韓琦ともに仁宗を補佐した。執政派であった欧陽脩は英宗・治平二年（一〇六五）に英宗の実父濮安懿王の呼称・待遇をめぐって台諫派であった呂誨・富弼らと対立して濮議の党争を巻き起こした。神宗即位の年、治平四年（一〇六七）に観文殿学士、刑部尚書、知亳州（安徽省亳州市）、翌熙寧元年（一〇六八）に兵部尚書に転じ、知青州（山東省青州市）となって野に下り、青苗銭に異をとなえて王安石に批判され、職を去ることを願ったが、許されず、三年（一〇七〇）に知蔡州（河南省汝南県）となり、四年六月、観文館学士・太子少師を最後に、職を去って、八月に潁州（安徽省阜陽県）に帰り、五年（一〇七二）閏七月、六六歳で亡くなった。

以上が欧陽脩の略歴である。

二　『新五代史』の執筆時期及び完成時期

欧陽脩が『新五代史』の執筆をはじめたのは、彼が政治改革に挫折して、夷陵県に左遷された仁宗・景祐三年（一〇三

六）であり、『新唐書』の編修に携わる年の前年・皇祐五年（一〇五三）には草稿が出来上がっていたと理解されている。もともと交友のあった尹洙と分担執筆することになっていたが、尹洙が慶暦七年（一〇四七）に病死したため、結局欧陽脩ひとりで書くことになった。執筆に十八年をかけている。この執筆に携わった時期の彼の年齢は三〇歳から四七歳までであることから、小川環樹氏がいわれるように、この史書は「学者としても、また文筆家としても成熟し、最もあぶらののっていたころの作品」であり、壮年期に書かれたものと考えられている。

三　『新五代史』の内容及び特徴

『新五代史』は七四巻・目録一巻からなり、正史の一つである。原名は『五代史記』であるが、北宋・薛居正らの手によって編纂された『旧五代史』に対して『新五代史』とも呼ばれるようになった。欧陽脩はこの史書を完成した後、公表せずにいたが、彼の没後熙寧五年（一〇七二）に神宗の命により献上され、国子監に収められ、版木に彫られて、世に広く知られるようになり、正史にも加えられた。

文体は、古文体で書かれ、簡潔で明瞭であり、奇数句を多くして、リズムの変化を与えており、行動と対話がその内容の大部分を占めて、人物と時代の性格を浮き彫りにしている点に特徴がある。

内容は本紀一二巻、列伝四五巻、考三巻、世家一〇巻、十国世家年譜一巻、四夷附録三巻からなる。このことからこの史書が司馬遷の『史記』の体裁に倣っていることがわかる。

本紀は極力『春秋』の経文を模倣し、一字一句に毀誉褒貶の意味を含ませて書き、また列伝と合わせて五代（九〇七～五九　後梁　九〇七～二三・後唐　九二三～三六・後晋　九三六～四六・後漢　九四六～五〇・後周　九五〇～五九）を一つ

の時代として捉え通史として表したといわれる。また本紀を『春秋』の経文に倣って極めて縮約して書いているために、その関連記事は列伝の記載と照応させてはじめて理解できるようになっている。

列伝の立て方には工夫がなされている。すなわち従来の正史には設けられていなかった家人伝、名臣伝、死節伝、死事伝、一行伝、唐六臣伝、義児伝、伶官伝、雑伝が立てられている点に特徴がある。家人伝を立てて尊親の意を表し、名臣伝・雑伝を立てて毀誉褒貶を行い、特に雑伝に入る者は君子の恥ずべきものとして排除している。死節伝・死事伝を立てて忠節の士を顕彰し、一行伝では才能・節義がありながら世に知られていない人物を取り上げて高く評価している。唐六臣伝では唐の遺臣たちを自己の保身を第一とした、「苟生」を貪った（いい加減な態度で生きている）者たちと批判している。義児伝を立てて、唐末五代において義児（異姓養子）が盛んに行われ、五代の君主八姓のうち実に三姓が義児から出たことを指摘し、また伶官伝を立てて、楽人または道化役者などが皇帝の寵愛を受け、高官にまでも昇ったことを取り上げて、五代の混乱した時代の異常さを表そうとしたのである。

欧陽脩は、五代においては礼楽・文章などは取るものがなく、後世に遺すものはないと考え、礼楽・芸文に関する記述を遺さず、司天・職方の二考だけを設けた。彼は天人相関説に対して疑いを持っており、天人相関説に因って記述されている『旧五代史』を批判して司天考を記した。職方考を立てて、五代十国における州名の変化・存廃を表にし、州県の沿革を記して『旧五代史』郡県志の不備を補った。二考はこのように『旧五代史』との見解の違いを示したり、あるいはその不備を補ったりしているものである。

世家を立てて、「中国」（中原に成立した五代諸王朝の支配領域）以外の領域を支配する十国―華中・華南地域に政権を樹立した九国と、山西に成立した一国をあわせた国々―の興亡史を表した。十国とは、すなわち揚州を中心に建てられた呉（九〇二～三七）、呉を継承して金陵を中心に建てられた南唐（九三七～七五）、四川の前蜀（八九一～九二五）・後蜀

（九三〇～六五）、広東の南漢（九〇九～七一）、湖南の楚（九〇七～五一）、浙江の呉越（九〇七～七八）、福建の閩（九〇九～四五）、湖北の南平（九〇七～六三）、山西の東漢（九五一～七九）である。

十国世家年譜を設けているが、「中国」に包摂されない十国が帝を称して改元しようがどうしようが、そうした事実にはお構いなく、ただ十国の年号などを年譜の形で整理しているにすぎない。

四夷との関係悪化を避けて外患にならないようにするために、四夷附録を設けて、夷狄に関する叙述をしている。特に北宋でも最大の外患であった契丹を中心に記述がなされ、三巻の内の二巻を占めているほどである。その他には吐渾、達靼、党項、突厥、吐蕃、回鶻、于闐、高麗、渤海、新羅、黒水・靺鞨、南詔蛮、牂牁蛮、昆明、占城が記されている。

最後に『新五代史』に付された徐無党の註（欧陽脩の弟子）ついて触れるが、これは欧陽脩の筆法の体例を説明したものである。これがなくては欧陽脩の著述内容を十分に理解することはできない。

以上が『新五代史』の内容と特徴である。

四　『新五代史』著述の意図

欧陽脩が『新五代史』を著述した意図は、乱世五代の事跡・人物の毀誉褒貶を明らかにして、時世の鑑戒にしようとした点にあった。特に嗚呼で始まる論（論賛）は「詠嘆的で、個人的な感情が露わにされすぎたと評せられているが、五代という異常な時期に対する作者の偽らざる感情の表れ」であった。

そこでは人間生活の規範である道義をもって歴史を把握しようとする姿勢が見られ、忠孝仁義を宣揚し、内には王室を中心とする国家の体統を重んじ、外には夷狄を討伐して国威を輝かそうとする中華思想を基本に、皇帝と官僚の君臣関係

のあり方を中心とする国家像を描いている。

こうした姿勢で全編を一貫した立場で書きつづけて、『新五代史』は完成を見たのである。

註

（一）本稿では翻訳のためのテキストを一般に通行している中華書局出版の標点本『新五代史』全三冊を使用するので、ここでは『新五代史』に名称を統一する。

参考文献

清・趙翼撰『二十二史劄記』

佐中　壮著「新五代史撰述の事情」（『史学雑誌』五〇―一一　一九三九）

吉田清治著『北宋全盛期の歴史』（弘文堂書房　一九四一）

内藤湖南著『支那史学史』（弘文堂　一九四九）

小川環樹著「新五代史の文体の特色」（『中国文学報』一八　一九六三）

石田　肇著「新五代史撰述の経緯」（『東洋文化』復刊四一・四二　一九七七）

石田　肇著「新五代史の体例について」（『東方学』五四　一九七七）

小林義廣著「欧陽脩における歴史叙述と慶暦の改革」（『史林』六六―四　一九八三）

小林義廣著『欧陽脩　その生涯と宗族』（創文社　二〇〇〇）

「廬陵歐陽文忠公年譜」『歐陽文忠公集』（『四部叢刊』初編集部）

『新五代史』七四巻・目録一巻

『宋史』巻三一九・歐陽脩伝

凡例

一　宋・歐陽修撰・徐無黨註『新五代史』七十四巻（北京中華書局排印本　一九七四）を底本とし、百衲本『五代史記』七十四巻（上海商務印書館涵芬樓景印本）及び清・呉蘭庭撰・曽貽芬校点『五代史記纂誤補』四巻、清・周壽昌撰・崔文印校点『五代史記纂誤補続』一巻、清・呉光耀・曽貽芬校点『五代史記纂誤続補』六巻（傅璇琮・徐海栄・徐吉軍主編『五代史書彙篇』全十冊　杭州出版社　二〇〇四）を参考とした。

一　地名の現所在地は魏嵩山主編『中国歴史地名大辞典』（広東教育出版社　一九九五）に拠った。

一　［　］内の文は訳者の付加したものである。

一　（　）内は訳者の註釈である。

一　本来なら原文の部分と訳文のそれを対照させて記載すべきであるが、敢えて原文を文末に置いた。訳文全体を通して読んでいただくためにこの形を取った次第である。

『新五代史』巻六一

ああ、唐が政治を誤り、天下［の人々］がその機につけ込んで、顔に入れ墨や髪剃りの刑を受けるような罪を犯したり不法な商いをしたりして、新たな天子が起った。呉と南唐では地方に勢力をはっていた悪辣な大族がその地をかすめ取った。蜀は要害堅固で豊かであり、漢は守りがかたかったけれども貧しかった。［しかし］貧しい国は自らつとめて努力して［存続し］、富める国は先に滅亡してしまった。閩は［領地が］狭く、荊［南］は四方から迫られ、楚は都から離れた辺境の地を開いた。［人々が］略奪に堪えられなかったのは呉越が最も甚だしい。嶺南の蜑族(一)［の人々］は、人を犠牲の動物のようにしか見ない劉氏（南漢を建国した劉氏を指す）を迎えた。百年の間、さまざまな勢力が立ち上がって覇を

争いあったため、山川［の交通路］も途絶え、風俗も通じなくなった。「［まさに太陽がのぼろうとすると、］清風がおこり、もろもろの陰気がひれふす。(二)太陽や月が出ると、たいまつの火が消える(三)」といわれる。だから聖人が出て天下を統一するのである。十国世家を作る。

呉世家第一

楊行密（本号）　子・渥　隆演　溥（次号）

楊行密(四)は、字は化源、廬州合淝県（安徽省合肥市）の人であった。彼は背丈が高く、身体が大きくて力持ちで、素手で百斤（約六〇kg）のものを持ち上げることができた。唐の［僖宗・］乾符年間（八七四～九）、江淮地域に盗賊が起こると、行密は盗賊となったが、捕らえられてしまった。［廬州］刺史鄭棨(五)は彼の容貌がりっぱであったので、縄を解いて放免してやった。後に募兵に応じて州の兵隊となり、朔方に派遣され国境を守備して、隊長に昇進した。任期を終えて帰還したが、軍の指揮官が彼をねたんで、再び国境守備に派遣しようともくろんだ。行密は任地に赴こうとして、軍の指揮官の宿舎を通り過ぎようとした。［そのとき］軍の指揮官が心のないうまい言葉で、行密が出発に際して欲しいものは何かないかとたずねた。行密は奮い立って「ただ公の首だけだ」と言い捨て、たちどころに彼の首をはねた。首をかかげて外に出て決起して乱を企て、自ら八営都知兵馬使(六)であると言いふらした。刺史郎幼復(七)が城を棄てて逃亡したため、行密は遂に廬州に拠点を置いた。

中和三年（八八三）、唐朝はそこで行密を廬州刺史に任命した。［光啓三年（八八七）、］補註(一)淮南節度使高駢(八)は［部

下であった］畢師鐸(九)に［治所である揚州を］攻められたため、行密を行軍司馬(一〇)に任命した。［そこで］行密は数千の兵を率いて揚州に赴こうとして、［揚州］天長［県］（安徽省天長県）に到着した。［しかし］師鐸がすでに駢を囚らえて、［昔の仲間であった］宣州（安徽省宣州市）［観察使］秦彦(一一)を引き入れて揚州に入城させていたため、行密は［揚州に］入ることができずに、蜀岡（江蘇省揚州市西北）に軍を駐屯させた。師鐸が兵数万を率いて［揚州城を］出て行密に攻撃を加えてきたため、行密は敗れたと偽って、陣営を放棄して逃げ去った。師鐸の兵は飢えていたため、勝ちに乗じて［行密の］軍営に進入し、兵糧や装備を奪い合った。［そこで］行密が兵を反転させて攻撃を加えたため、師鐸は大敗し、単騎で揚州城に逃げ帰り、遂に高駢を殺害した。行密は駢が死んだことを聞き、兵に白の喪服を着せ、揚州城に向かって慟哭すること、三日に及んだ。［行密が］揚州城の西門を攻めると、彦と師鐸は東塘（江蘇省揚州市東北）に逃げ去った。行密は遂に揚州城に入った。

この時すでに城中の穀物倉が空っぽであった。飢えた民は互いに殺し合って食らい、夫婦や父子はすすんで互いに屠殺業者の所に引っ張ってきてこれを売った。［そこで］屠殺業者は羊や豚のようにこれを切りさばいた。［こうしたありさまだったので、］行密は［揚州を］守りきれないと思い、逃げようと考えた。そうこうしているうちに蔡州［節度使］の秦宗権(一二)が弟の宗衡を派遣して淮南の地を奪い取らせようとした。［そこに］彦と師鐸が東塘から戻ってきて、宗衡と合流した。［しかし］行密は城を閉じて敢えて出ようとはしなかった。やがて宗衡が副将の孫儒(一三)に殺された。［軍の実権を握った］儒が高郵［県］（江蘇省高郵県）を攻めてこれを撃破したので、行密は益ます恐れた。彼の食客であった袁襲(一四)が言った。

「私が新たに寄せ集められた兵でもって装備も兵糧もない城を守りましょう。しかし諸将には駢の昔なじみが多く、手厚い恩恵を与えたり、平素の信義を抱いたり、力で治めようとしてもあなた様に心から従うような者はおりますまい。今

まさに孫儒の兵は意気盛んで、攻めれば必ず勝ちましょう。今は、諸将が迷って決心しかねており、[それぞれの軍勢の]強いか弱いかによって、味方するか背くかを選んでいる時でございます。海陵（江蘇省泰州市）鎮使高覇（一五）は駢の旧将ですから、全く我らの役には立ちますまい」

そこで行密は軍令を出して覇を呼び寄せた。覇は自らの兵を率いて広陵（揚州を指す）に入った。行密は覇に天長[県]（安徽省天長県）を守らせようと考えた。[しかし]襲は[反対して]言った。

「私は覇に疑いを持っていたので、呼び寄せたのです。二度と用いることはできません。そもそも我らが儒に勝てましたなら、覇を任用する所はございません。不幸にして勝てませんでしたら、天長[県]はどうして我が所有となりましょうや。覇を殺して彼の兵を併合する方がよろしゅうございます」

行密は軍を慰労することに託けて覇を捕らえて族滅し、彼の兵数千を獲得した。ほどなくして孫儒は秦彦と畢師鐸を殺し、彼らの兵を併合して行密を攻めてきた。行密は海陵[鎮]に逃れようと考えた。[しかし]襲は言った。

「海陵は守るのが難しゅうございます。ですが廬州は旧支配地であり、城壁や倉が完備しており、今後の計略を立てるのが容易でございます」

そこで行密は廬州に逃れた。しばらくしても[行密は]向かう地がわからなかったので、襲に尋ねた。

「わしは、戦いをやめ、行程を倍にして、西の洪州（江西省南昌市）を取ろうと思うが、どうか」

襲は答えた。

「鍾伝（一六）は新たに江西を手に入れ、その勢力を推しはかることはできません。しかし秦彦は広陵に入城するとすぐに、池州（安徽省貴池市）刺史趙鍠（一七）を招聘して宣州（安徽省宣州市）を委ねました。今、彦はとりあえず死に、鍠は頼るところを失っております。しかも宣州を守ることは彼本来の願いではなく、そのうえ彼の人となりからしてあなた

様の敵ではございません。ここは取るべきです」

そこで行密は兵を率いて鍠を攻め、曷山（安徽省当塗県西南）で戦い、大いに打ち負かした。進撃して宣州を取り囲んだ。［そのため］鍠は城を棄てて逃げたが、［行密の兵が］追いついて彼を殺した。行密はついに宣州に入った。

［昭宗・］龍紀元年（八八九）、唐朝は行密を宣州観察使に任命した。行密は田頵（一八）・安仁義（一九）・李神福（二〇）らを派遣して浙西（鎮海軍節度使の統轄地域を指す）を攻めさせ、［大順元年（八九〇）］（補註二）、蘇（江蘇省蘇州市）・常（江蘇省常州市）・潤州（江蘇省鎮江市）を取った。［大順］二年（補註三）（八九一）、［淮南節度使管轄下の］滁（安徽省滁州市）・和州（安徽省和県）を取った。［昭宗・］景福元年（八九二）、［淮南節度使管轄下の］楚州（江蘇省淮安市）を取った。孫儒が行密を追い出して広陵に入ってから、しばらくして［ここも］また守ることができなくなった。そこで城を焼き、民のうちの老人や病人を殺して、軍に兵糧を送り、兵を駆り立てて江を渡った。［その兵は］五十万と言いふれ、行密を攻撃した。［楊行密の］諸将の田頵・劉威らはこれに遭遇し、たちまち敗退した。［そこで］行密は銅官（安徽省銅陵市）に逃れようと思った。［その時］彼の食客であった戴友規（二一）が言った。

「儒が［攻めて］来ましたが、意気が盛んで兵も多ございます。ですから彼の精鋭は阻むことができませんが、打ち砕くことはできますし、大勢の兵には敵いませんが、しばらくすれば破ることができます。もしこの状況を避けてお逃げになりましたならば、擒になるだけございます」

劉威（二二）も言った。

「城を背にし、柵を堅固にしていてさえすれば、戦わないで儒の兵を疲弊させることができます」

行密はもっともだと思った。しばらくして儒の軍隊が飢え、疫病も蔓延したので、行密は全軍をあげて攻撃した。［その結果］儒は敗北して、捕らえられた。［儒は］死に直面して、顔を上げふりかえって威を見て言った。

「貴公がこの作戦を立ててわしを破ったと聞いた。わしに貴公のような将を持たせたならば、敗れたであろうか、いや敗れなかったであろうに」

行密は儒の生き残った数千の兵を集めて、黒い装束に鎧を着けさせ、「黒雲都」と名づけて、親衛軍として常置させた。

この歳、ふたたび揚州に入った。［そこで］唐朝は行密を淮南節度使に任命した。乾寧二年（八九五）に検校太傅・同中書門下平章事（二三）を加えた。行密は田頵に宣州を守らせ、安仁義に潤州を守らせた。昇州（江蘇省南京市）刺史馮弘鐸（二四）が帰属してきた。頵らを本隊から分けて派遣して攻略させ、淮水以南及び長江以東の諸州をすべて陥とした。進撃して蘇州を攻め、刺史成及（二五）を擒にした。四年（八九七）、兗州（山東省兗州県）［節度使］朱瑾（二六）が行密のもとに逃れた。当初、瑾は梁［の朱全忠］（二七）に攻められたため、援軍を晋［の李克用］（二八）に求めた。晋が李承嗣（二九）に精鋭な騎兵数千を率いさせて瑾を援護させたが、瑾が敗れたため、共に行密のもとに逃亡した。行密の兵隊はみな江・淮の人々で構成され、［特に］淮の兵は軽装備で弱かった。瑾の騎兵の精鋭軍を獲得して、軍はますます志気があがった。

この歳、梁の太祖［朱全忠］が葛従周（三〇）・龐師古（三一）を派遣して行密の寿州（安徽省寿県）を攻撃させたが、行密は梁の軍を清口（清河口を指す。江蘇省淮陰市西南）で撃破して、師古を殺した。しかし従周が兵を集めて逃げたので、淠河（源が安徽省霍山県南霍山から出て、北流して寿県の西・正陽関に至って淮河に入る川）で追いついて、ふたたび大いに破った。

五年（八九八）、銭鏐（三二）が蘇州を攻めて、周本（三三）と白方湖（現地名不明）で戦ったが、本が敗れたため、［光化元年（八九八）］（補註四）、蘇州はふたたび［呉］越に入った。天復元年（九〇一）、李神福を派遣して［呉］越を攻撃させた。［神福は］臨安［県］（浙江省臨安県西北）で戦い、大いに敗り、呉越の将顧全武を擒にして帰還した。

二年（九〇二）、馮弘鐸は叛乱を起こして、宣州を襲撃し、田頵と曷山（安徽省当塗県西南）で戦かった。［しかし］弘

鐸は敗れ、海に逃れようとした。行密は自ら東塘（江蘇省揚州市東北湾頭鎮付近）に出向いて弘鐸を迎え入れようと、人を遣って弘鐸に告げさせた。

「勝敗というものは戦いにはつきものである。一度の戦いで敗れたぐらいで、どうして苦しんで自分から島に身を棄てようとするのか。わしの幕府は小さいが、それでもまだ　貴君を受け入れることぐらいできるぞ」

弘鐸はうれし涙を流した。行密は十騎あまりを従えて、馳せて彼の軍に入り、弘鐸を節度副使に任命し、弘鐸に代わって李神福を昇州刺史に充てた。

この歳、唐の昭宗は、岐(三四)にいたときに、江淮宣諭使李儼(三五)を派遣して行密を東面諸道行営都統・検校太師・中書令(三六)に任命し、呉王［の位］を授けさせた。三年（九〇三）、［行密は］李神福を鄂岳招討使(三七)に任命し、［武昌節度使］杜洪(三八)を攻撃させた。荊南［節度使］の成汭(三九)が洪を救おうとしたので、神福は荊南の軍を君山（湖南省岳陽市西南）で破った。

梁の軍が青州（山東省青州市）を攻めてきたので、［平盧節度使］王師範(四〇)は［行密に］援軍を求めてきた。［そこで］王茂章(四一)を遣って青州を救援させ、大いに梁の軍を破り、朱友寧を殺した。友寧は梁の太祖の［兄の］息子(補註五)である。太祖はひどく怒って、自分から［軍を］率いて茂章を撃とうとした。軍勢は二十万と言いふれた。［しかし］ふたたび茂章に敗れた。

田頵は叛乱を起こすと、昇州を襲撃して李神福の妻子を捕らえ、宣州に帰還した。［そこで］行密が神福を召還して頵を討伐しようとしたので、頵は自分の武将である王壇を遣ってこれを迎え撃たせた。また神福に書簡を送り、彼の妻子を［楯に取って］神福を［味方に］引き入れようとしたが、［それに対して］神福はいった。

「わしは一兵卒から呉王に従って義兵を起こしたが、今は大将となっておる。恩義に逆らって、妻子を思いやることに

耐えられようか、耐えられはしない」

［神福は］直ちに顥の使者を斬り捨て自ら絶交した。軍の兵士はこのことを聞いて感激し奮い立った。［神福が］吉陽磯（安徽省東至県西北吉陽鎮付近）に到着すると、顥は神福の子・承鼎を捕らえて神福を招き寄せようとした。［しかし］神福は側つきの家来を叱って息子を射させ、遂に壇の軍を吉陽で破った。行密は別に［漣水制置使］臺濛（四二）を派遣して顥を攻撃させた。［その結果］顥は敗れて死んだ。当初、顥、安仁義、朱延寿（四三）はみな行密に従って卑賤から身を起こし、［活躍した結果、］江淮がやっと治まるようになって、民力や兵力を休め養うことを考えるようになった。しかし三人がみな勇猛で掌握するのが難しいので、［行密は］彼らを除こうと思ったが、まだ実行することができなかった。天復二年（九〇二）、銭鏐は自分の武将である許再思（四四）らに叛乱を起こされて、これを取り囲んだが、［そこで］再思は顥を招いて鏐を攻めさせた。杭州［の反乱軍側］が今にも勝利しそうであったが、行密は鏐からの賄賂を受け取って、顥に命じて武装を解除させた。［だが、］顥はこの行為を憎んだ。顥は以前に広陵［攻略］を図ろうとしたことがあったが、［その際に］行密の諸将の多くが顥に賄賂を求め、また牢獄の小役人もこれを要求する者がいた。［しかし］顥は怒って言い放った。

「小役人め、わしを獄に繋ごうと考えておるのか」

顥は［支配地の宣州に］帰って、遂に［行密に］背いて叛乱を起こした。

仁義はこの挙を聞いて、また叛乱を起こし、東塘を焼き、常州を襲撃した。常州刺史李遇（四五）は［城を］出て戦い、仁義を眺め見て甚だしく罵った。仁義は軍を留めて言った。

「李遇が強いてあのようにわしに恥をかかせようとするのは、必ず伏兵があるからじゃ」

遂に軍を引いて退いた。果たして伏兵が現れ、夾岡（江蘇省丹陽市北）（補註六）まで追ってきた。仁義は幟を立て、鎧を

解いて食事を取っていたが、遇の兵は無理に追おうとはしなかった。［そこで］仁義はふたたび潤州に入った。行密は［潤州行営招討使］王茂章・［馬歩軍使］李徳誠(四六)・［馬軍都指揮使］米志誠(四七)らを派遣して潤州を包囲させた。呉の軍中は、朱瑾の槊に長じていることと志誠の弓に長じていることを重んじて、みな第一とした。しかし仁義は以前に弓の技を自慢して言った。

「志誠の弓十矢は瑾の槊一本にかなわない。［そして］瑾の槊十本は仁義の弓一矢にかなわない。［これほどわしの技はすごいのだ。］」

茂章らと戦う毎に、必ず矢を命中させてから矢を放った。こうした仁義の働きに呉軍は恐れをなして、敢えて近づこうとはしなかった。行密も仁義に降伏を勧めようと考えたが、仁義はためらって決断できないでいた。［そこで］茂章は、仁義が躊躇しているすきに、地下道を掘って進入し、仁義を捕らえて、広陵で斬り殺した。

延寿という人物は行密の夫人朱氏の弟であった。頴と仁義が反旗を翻すと、行密は延寿を疑い、そこで眼病になったと偽り、延寿の使者に接見する毎に、必ず見るところが定まらないようなふりをして見せた。試しに歩こうとして、柱に触れて倒れたため、朱夫人は行密を介護した。しばらくして目が覚めると、泣いて言った。

「我が事業は成し遂げたが、この目を失ってしまった。これは天がわしを見捨てたのだ。我が息子たちには［我が］事業を委ねることができないので、是非とも延寿にこれを託したい。わしには後悔はない」

夫人は喜んで、急ぎ延寿を呼び寄せた。延寿がやって来ると、行密は寝門で出迎えて延寿を刺し殺し、朱夫人を［離縁して］嫁に出した。

［哀帝・］天祐二年（九〇五）、［鄂岳招討使］劉存(四八)を派遣して鄂州（湖北省武漢市武昌）を攻めて城を焼かせた。城中の兵が囲みを突いて出てきたため、諸将は急ぎ攻撃することを要求した。［しかし］存は答えた。

「これを攻撃してふたたび城に入ってしまったならば、城の備えは益ます堅固になるであろう。逃げるのを許してから城を取るべきである」

この日、城が陥落し、杜洪を捕らえて広陵で斬り殺した。九月、梁の兵が襄州（湖北省襄樊市）を攻め破ったため、［山南東道節度使］趙匡凝（四九）は行密のもとに逃れた。十一月、行密が亡くなった。歳は五十四、諡は武忠とつけられた。息子の渥（五〇）が位に即いた。溥（五一）が分をわきまえず天子の称号を用いたとき、行密に追尊して太祖武皇帝とした。陵墓は興陵という。

訳註

（一）蜑とはおそらくは嶺南地区に居住し、水上生活をしている異民族を指すものと思われる（宋・周去非撰『嶺外代答』巻三・蜑蛮の条）。

（二）『漢書』巻七五・李尋伝の条に「夫日者、衆陽之長、輝光所燭、万里同晷、人君之表也。故日将旦、清風発、群陰伏、君以臨朝、不牽於色。日初出、炎以陽、君登朝、佞不行、忠直進、不蔽障」とある。

（三）『荘子』内篇逍遙遊第一の条に「堯譲天下於許由曰、『日月出矣而爝火不息、其於光也、不亦難乎。・・・』」とある。

（四）楊行密（八五二～九〇五）に関する伝記は本書の他に『新唐書』巻一八八、『旧五代史』巻一三四、『十国春秋』巻一などがある。

（五）鄭棨（？～八九九）は「鄭縋」とも書かれる。彼は僖宗乾符（八七四～九）末年に廬州刺史であった（郁賢皓著『唐刺史考全編』巻一二九・廬州の条）。のち昭宗期に宰相となった人物である。『旧唐書』巻一二九鄭縋伝、『新唐書』巻一八三鄭縋伝及び『北夢瑣言』巻七を参照。『開天伝信記』一巻の著者。刺史は州の行政長官。

（六）八営については不明。この都知兵馬使は廬州軍の最高指揮官を指すものと思われる。都知兵馬使に関しては周藤吉之著「一〇五代節度使の支配体制―特に宋代職役との関聯に於いて―」（『宋代経済史研究』所収　一九六二年　東京大学出版会）を参照。

（七）郎幼復の伝記はない。ただ廬州刺史郎幼復が楊行密によって廬州を逐われたのは中和二年（八八二）のことである（『新唐書』巻

九・僖宗本紀）。

（八）高駢（？～八八七）は神策軍（禁軍）出身の武人で、唐末の節度使。節度使とは、唐中期から五代期に存在した藩鎮（地方軍閥）の軍事・財政・行政をつかさどる長官、複数の州を管轄する地方勢力である。彼が淮南節度使であった時期は乾符六年（八七九）から光啓三年（八八七）までの八年間であった（呉廷燮撰『唐方鎮年表』巻五・淮南の条）。淮南藩鎮の治所は揚州であった（同上）。以下、節度使の在任期間などに関する記述は、呉廷燮撰『唐方鎮年表』及び朱玉龍編著『五代十国方鎮年表』（二十四史研究資料叢刊　中華書局）による。高駢の記事に関しては『旧唐書』巻一八二・高駢伝及び『新唐書』巻二二四下・叛臣下・高駢伝を参照。

（九）畢師鐸（？～八八八）はもともと唐末の叛乱指導者であった黄巣の部下であったが、のちに高駢に投降し彼の配下となり、彼に背いたときには左廂都知兵馬使であった（『資治通鑑』巻二五七・光啓三年（八八七）夏四月の条）。畢師鐸の記事に関しては『旧唐書』巻一八二・高駢伝及び『新唐書』巻二二四下・叛臣下・高駢伝を参照。

（一〇）行軍司馬とは近代軍隊における参謀長にあたり、軍の実力者をあてていた。註（六）周藤前掲論文を参照。

（一一）秦彦（？～八八八）は畢師鐸と同じく黄巣の部下であったが、ともに高駢に投降して配下となり、和州刺史を経て、中和二年（八八二）に宣州観察使となった（『資治通鑑』巻二五三・乾符六年春四月の条、同巻二五五・中和二年十二月の条）。秦彦が任命された観察使とは節度使とほぼ同じ役目で、節度使よりも格下にあたる。秦彦の記事に関しては『旧唐書』巻一八二・高駢伝及び『新唐書』巻二二四下・叛臣下・高駢伝を参照。

（一二）秦宗権（？～八八九）はもともと忠武軍節度使の武将であったが、のち中和元年（八八一）に蔡州節度使となった（『旧唐書』巻一九下・僖宗本紀・中和元年八月の条）。秦宗権に関する記事は『旧唐書』巻二〇〇下・秦宗権伝及び『新唐書』巻二二五下・逆臣下・秦宗権伝の条を参照。

（一三）孫儒は蔡州節度使秦宗権配下の武将であったが、揚州出兵を機に秦宗権から離反した（『資治通鑑』巻二五七・光啓三年の条）。

（一四）袁襲（？～八八九）は廬州廬江県（安徽省廬江県）の出身で、楊行密のブレインであった（『資治通鑑』巻二五七・光啓三年の条）。楊行密と同じ州の出身。

（一五）高霸（？～八八八）は洪州南昌県（江西省南昌市）の出身で、高駢の元武将であり、海陵鎮使であった（『資治通鑑』巻二五六・

光啓二年六月の条）。海陵鎮は当時民が五万戸、兵三万の規模があった（同上）。鎮使は鎮遏使ともいい、鎮を統轄する司令官である。

（一六）鍾伝（？～九〇六）は洪州高安県（江西省高安県）の出身で、唐末の叛乱の指導者であった王仙芝が江西地域を掠奪した際に蛮獠を集め、山に砦を築いて勢力を貯え、王仙芝から撫州を奪い返して刺史となり、のちに江西観察使を追い出して洪州に拠点を置き、江西観察使となった（『資治通鑑』巻二五五・中和二年五月～七月の条）。鍾伝が江西観察使であったのは中和二年（八八二）から天祐三年（九〇六）に亡くなるまでの十六年間であった（呉廷燮撰『唐方鎮年表』巻五・江西の条）。鍾伝の記事は『新唐書』巻一九〇本伝を参照。

（一七）趙鍠（？～八八九）は秦彦（註（一一）参照）の部下で、池州刺史から光啓三年（八八七）に宣歙観察使となり、龍紀元年（八八九）に呉の楊行密に攻められて破れ、斬首された人物（『資治通鑑』巻二五七・光啓三年の条～二五八・龍紀元年の条、『新唐書』巻一八九・田頵伝）。趙鍠の部下で後に楊行密に従って活躍した人物に周本（註（三三）参照）と李徳誠（註（四六）参照）がいる。

（一八）田頵（？～九〇三）は廬州合淝県の出身で楊行密とは同郷で、募兵当時からの仲間であり、後に行密と離反する（『九国志』巻三）。

（一九）安仁義（？～九〇五）は突厥沙陀部出身の異民族で、秦宗権の武将であったが、秦宗権による淮南攻撃の際に楊行密に投降した人物である（『九国志』巻三）。

（二〇）李神福は洺州（河北省永年県東南）出身で、上党［郡］（＝潞州、現在の山西省長治市）の軍籍にあったが、淮海（江蘇省中部及び北部一帯）に駐屯していたが、のちに楊行密に投降した人物（『九国志』巻一）。

（二一）戴友規は廬州（安徽省合肥市）の出身で（『資治通鑑』巻二五九・景福元年春正月の条）、楊行密の賓客（ブレイン）であった（『十国春秋』巻五）。

（二二）劉威は廬州慎県（安徽省肥東県東北梁園）の出身で、楊行密・田頵とは叛乱当初からの仲間である（『九国志』巻一）。

（二三）唐代、太傅は三師の一つ、正一品で、属僚は置かず、名誉職であった（『アジア歴史事典』平凡社・宮崎市定による）。楊行密が賜った検校太傅はいわゆる検校官といわれるもので、淮南節度使という本官に加えてその品級を昇進させたものである。また同

中書門下平章事とは、唐朝は最初、三省の尚書令・中書令・侍中を宰相の職と定めたが、のちに尚書令に代えて左右僕射を宰相とし、これ以外の官の者を宰相とする時に名目として加えたものである（内藤乾吉著『中国法制史考証』有斐閣　一九六三年）。しかし楊行密が昭宗から賜った同中書門下平章事は実際にこの職務を果たしたのではなく、単なる名誉職であったと思われる。ただ当時有力な節度使たちは検校官を帯びることが多かったようである（洪邁著『容斎三筆』巻七・節度使称太尉の条）。

（二四）馮弘鐸は泗州漣水県（江蘇省漣水県）出身で、武寧軍節度使時溥の副将であったが、時溥に疑われ、禍を恐れて、同僚の張雄と共に長江を渡って蘇州に拠り、のち昇州刺史となった人物である（『新唐書』巻一九〇・張雄伝の条）。

（二五）成及（八四六～九一三）は杭州銭塘県（浙江省杭州市）出身で、呉越を建国した銭鏐の部下であり、建国の母体となった杭州八都の一つである静（靖）江都－杭州富春県（浙江省富陽県）を支配－の都将であり（伊藤宏明「唐五代の都将に関する覚書（中）」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』三六を参照）、　のち功をあげて潤州刺史を経て、蘇州刺史に遷り、乾寧三年（八九六）に呉の楊行密に蘇州を攻められ、その上常熟鎮将陸郢らの裏切りに遭って行密に投降したが、厚礼を受けて呉越に帰された経歴をもつ人物（『九国志』巻五）。

（二六）朱瑾は宋州下邑県（安徽省碭山県東）の出身で、天平軍節度使（治所は鄆州、在任期間は中和二年から乾寧四年）朱瑄の従父弟（いとこ）で、天平軍の軍将。彼は光啓二年（八八六）に天平軍に隣接する泰寧節度使（治所は兗州　在任期間は広明元年から光啓二年）斉克讓を追放して節度留後となり、翌三年（八八七）、宣武軍節度使朱全忠と共に蔡州節度使秦宗権を敗走させたが、その後朱全忠と覇をめぐって対立し、乾寧元年（八九四）に朱全忠に攻められて、連年戦いを交えたが、形勢が不利になり、河東の李克用に援軍を求めて再度戦った。しかし同四年、敗れて、河東の驍将李承嗣とともに呉の楊行密のもとに逃れた（『旧唐書』巻一八二、『旧五代史』巻一三、『新五代史』巻四二、『九国志』巻二、『五代史補』巻一）。

（二七）朱全忠（八五二～九一二）は唐王朝を倒して後梁を建国した人物。彼は宋州碭山県（安徽省碭山県東北）の出身で、黄巣の叛乱軍に参加し、のちに唐朝に投降して宣武軍節度使から累進して、天復元年（九〇一）に梁王に封ぜられた。四年（九〇四）に昭宗を殺し、哀帝を立て譲位を迫って天祐四年（九〇七）に大梁を建国した（『旧五代史』巻一、『新五代史』巻一、『五代史補』巻一）。

（二八）李克用（八五六～九〇八）は突厥沙陀部出身で、唐末、朱全忠と覇を争ったライバル。もと朱邪氏。祖父の時に唐朝に帰朝し、

父朱邪赤心が龐勛の乱平定の功によって懿宗より李国昌の姓名を賜り、振武軍節度使（山西省を拠点とした軍閥）となった。李克用はその第三子で、勇猛で一眼微小であったため、独眼竜と呼ばれ、彼の率いる黒衣の騎馬軍は恐れられた。中和三年（八八三）に黄巣の乱を破り、長安を回復して、その功によって河東節度使となった。この後唐朝をめぐって覇を争い、朱全忠が即位すると、討伐を受け、戦中に没した（『新唐書』巻二一八、『旧五代史』巻二五、『新五代史』巻四、『五代史補』巻二）。

（二九）李承嗣（八六五～九二〇）は李克用の部下で、代州鴈門県（山西省代県）の出身。彼は河東の李克用に従い黄巣の乱平定で功をあげて汾州（山西省汾陽県）司馬を授けられ、楡次（山西省楡次県）鎮将、洺州（河北省永年県東北）刺史、教練使を歴任し、乾寧二年（八九五）、李克用の命を受け、驍将史儼とともに三千騎を率いて朱瑄・朱瑾の救援に向かったが、敗れて、同四年、朱瑾、史儼と呉の楊行密のもとに逃れた（『旧五代史』巻五五、『十国春秋』巻八）。

（三〇）葛従周は朱全忠の部下で、後梁建国の功臣である。濮州甄城県（山東省鄄城県）の出身。彼は初め黄巣の叛乱に身を投じて軍校に昇進したが、中和四年（八八四）に朱全忠に敗れて仲間と投降し、その後兗州の斉克讓、蔡州の秦宗権、晋の李克用らと戦い、戦功をあげて、懐州（河南省泌陽市）刺史、曹州（山東省曹県東北）刺史、宿州（安徽省宿県）刺史、兗州（山東省兗州県）留後を歴任し、乾寧四年（八九七）に龐師古と呉の楊行密を攻めたが、龐師古の戦死を聞くと、撤退した（『旧五代史』巻一六、『新五代史』巻二一）。

（三一）龐師古は朱全忠の部下で、曹州南華県（山東省菏沢市西北）の出身。彼は中涓（接待係）として朱全忠に仕え、偏将となり、蔡賊討伐で功をあげて都指揮使に昇格し、のちに沿淮地域に転戦し、感化節度使（治所は徐州　在任期間は中和二年から景福二年）時溥を斬り、鄆州の朱瑄、兗州の朱瑾を降して、その功で乾寧四年（八九七）正月、天平軍節度留後となり、ついで徐州節度留後となった。同年八月、葛従周と大軍を率いて淮河を渡り楊行密を攻めたが、陣中に没した（『旧五代史』巻二一、『新五代史』巻二一）。

（三二）錢鏐（八五二～九三二）は呉越の建国者で、杭州臨安県（浙江省臨安県）出身（『旧五代史』巻一三三、『新五代史』巻六七、『五代史補』巻一、『呉越備史』巻一、『十国春秋』巻七七）。詳細は『新五代史』巻六七・呉越世家を参照（翻訳予定）。

（三三）周本は舒州宿松県（安徽省宿松県）の出身で、もと宣州節度使趙鍠の将であったが、楊行密が趙鍠を破った時に、その武勇を

評価されて裨将（副将）となった淮南の名将（『九国志』巻四・南唐の条、『馬氏南唐書』巻九、『十国春秋』巻七）。

（三四）当時、岐（鳳翔＝岐州を指す）に行在所があったのは、朱全忠が昭宗を長安から洛陽に移そうと計画していることを知った枢密使韓全誨が朱全忠に先んじて、昭宗を都に近い鳳翔節度使（治所は鳳翔府　在任期間は唐・光啓三年～後唐・同光二年の三十七年間）李茂貞のもとに移したことによる。その行為に激怒した朱全忠が鳳翔を囲んだのである。この状況を打開するために、天復二年三月、昭宗が李儼を派遣したのは、呉の楊行密に討伐軍を組織するように依頼するためであった。（『資治通鑑』巻二六二～三・天復元年～三年の条）。

（三五）李儼は唐の僖宗の時宰相張濬の子で、李姓を賜って、李氏を名のる。彼はこの当時左金吾大将軍であったが、天復二年三月、昭宗の命を受けて江淮宣諭使として、楊行密に宣武・宣義・天平・護国四鎮節度使朱全忠の討伐の命を伝えに来たのである。その後朱全忠が鳳翔（陝西省鳳翔県）の李茂貞に勝って父親が殺されると、そのまま広陵（江蘇省揚州市）に留まった（『新唐書』巻一八八楊行密伝、『資治通鑑』巻二六三～二七〇、『十国春秋』巻八）。

（三六）楊行密が昭宗に任命された東面諸道行営都統とは宣武軍節度使朱全忠討伐の総司令官である。検校太師は検校官、中書令は中書省の長官であり、いずれも実職ではなく、名誉職であり、楊行密の地位を高からしめるためのものである。太師は三師の一つ、正一品。

（三七）鄂岳招討使とは武昌節度使杜洪討伐司令官という意味。招討とは招撫征討の意味で、敵を帰順させたり攻め滅ぼしたりすることを示し、鄂岳とは武昌藩鎮を指し、鄂州は今の湖北省武漢市武昌、岳州は今の湖南省岳陽市を指す。

（三八）杜洪は鄂州出身で、もともと俳児（芸人）であったが、中和（八八一～八八四）末年に鄂州の武将となり、後に岳州刺史を追放してその地に自立し、光啓二年（八八六）に武昌節度使となり、天祐二年（九〇五）に楊行密に滅ぼされた（『新唐書』巻一九〇、『旧五代史』巻一七）。

（三九）成汭は青州（山東省青州市）の出身で、若い時から素行が悪く、酒に酔って人を殺したため、故郷を逃れ、旅の僧に身をやつし、後に蔡賊の親分の仮子（養子）になって郭禹と名を変え、そこも去って荊南節度使に投降して副将となったが、光啓元年（八八五）に荊南藩鎮の内紛から身を避けて仲間千人と共に帰州（湖北省秭帰県）を襲いそこに自立し、三年後の文徳元年（八八八）

に荊南節度使となり、天復三年（九〇三）に楊行密に滅ぼされた（『新唐書』巻一九〇、『旧五代史』巻一七）。

（四〇）王師範は青州（山東省青州市）の出身で、父親の平盧節度使王敬武の死後、十六歳でその跡を継いで龍紀元年（八八九）に節度使となり、その後、後梁の朱全忠と昭宗をめぐって対立し、楊行密らに援軍を求めるなどしたが、結局敗北し、天祐二年（九〇五）に節度使の地位を失い、洛陽に幽閉され、その地で族滅された（『新唐書』巻一八七、『旧五代史』巻一三、『新五代史』巻四二・雑伝）。

（四一）王茂章は楊行密と同じ廬州合淝県（安徽省合肥市）の出身で、性格は気性が荒く、質朴で礼儀知らずであり、若い時に行密に従って淮南に蜂起して将となり、平盧節度使王師範が行密に援軍を求めてきたため、行密の命を受け師範の救援に向かい、後梁の軍と戦い、敵将朱友寧（朱全忠の兄の子）を破ってこれを斬り殺し、朱全忠の反撃に遭い、必死の思いで淮南に帰還した。後に潤州団練使となった。しかし行密が亡くなると、息子の渥と対立して呉越の銭鏐（註（三一）参照）のもとに奔り、次いで朱全忠に請われて後梁に帰属し、名前を景仁と変え、後梁の太祖と末帝二代に仕えた。（『旧五代史』巻二三、『新五代史』巻二三・梁臣伝、『十国春秋』巻七）

（四二）臺濛（八五四～九〇四）は楊行密と同じ廬州合淝県（安徽省合肥市）の出身で、若い時に金牛鎮（安徽省廬江県西北金牛郷か？）将となり、楊行密が廬州に立った時に彼に帰属し、その後秦彦・畢師鐸・趙鍠・孫儒（註（九）（一一）（一三）参照）の平定に戦功をあげ、行密が広陵に拠点を定めた時に楚州（江蘇省淮安市）刺史となり、光化二年には海州（江蘇省連雲港市西南）刺史となって、州民に訴えられて、漣水（江蘇省漣水県）制置使（戦時下の秩序維持のために置かれた官職）に左遷され、宣州の田頵の叛乱の平定に功をあげて宣州観察使となり、任官中に亡くなった（『新唐書』巻一八九、『九国志』巻一、『十国春秋』巻五）。

（四三）朱延寿は廬州舒城（安徽省舒城県）の出身で、楊行密の妻の弟であり、二十歳前に行密に仕えて秦彦・畢師鐸・趙鍠・孫儒征討に功を上げ、その後寿州を抜いて寿州刺史となり、さらに蘄・光二州陥落の功によって寿州団練使に昇進し、天復二年に昭宗から朱全忠討伐の詔勅が行密にもたらされた時に奉国軍節度使を賜ったが、田頵・安仁義の叛乱に荷担して行密に殺された（『新唐書』巻一八九、『旧五代史』巻一七、『九国志』巻三、『十国春秋』巻一三）。

（四四）許再思は当時、鎮海軍節度使銭鏐配下の武勇左都指揮使であった。銭鏐が治所の杭州から故郷の衣錦軍（臨安県）に帰るに際

して武勇右都指揮使徐綰に衣錦軍の水路整備を命じたが、この役に対して兵士の間から不満が起こったが、認められなかった。そこで徐綰は病と称して先に杭州に帰還し、叛乱を起こした。これに呼応したのが、留守部隊の許再思であった（『資治通鑑』巻二六三・天復二年の条、『新五代史』巻六七・呉越世家）。

（四五）李遇は楊行密と同じ廬州合淝県（安徽省合肥市）の出身で、初め楊行密の幕下に仕え、光啓中（八八五～七）に後梁の軍を廬州慎県（安徽省肥東県東北梁園）で禦いだ際に、槊を携えて単騎で、先頭に立って敵を破り、その功で伍長から馬軍副指揮使に昇進し、秦彦・畢師鐸・趙鍠・孫儒平定に従い、淮南馬歩諸軍都尉、常州（江蘇省常州市）刺史、宣州（安徽省宣州市）団練使を歴任し、徐温専政の時に徐温と対立した（『九国志』巻一、『十国春秋』巻五）。

（四六）李徳誠は広陵郡（江蘇省揚州市　『馬氏南唐書』巻九）か、または陳州西華県（河南省西華県南　『資治通鑑』巻二五八）の出身で、宣歙観察使趙鍠の給使であったが、趙鍠が楊行密に滅ぼされると、行密に仕え、征討軍に従って、淮南馬歩軍使となり、潤州留後、撫・虔・洪三鎮を歴任し、後に南唐の佐命の臣となった（『馬氏南唐書』巻九、『陸氏南唐書』巻九、『十国春秋』巻七）。

（四七）米志誠は沙陀部（突厥）の出身で、馬術と弓術に習熟して、強く勇ましい人物として知れわたっていた。その彼が乾寧四年（八九七）に楊行密のもとに身を寄せ、後梁の武将であった龐師古・葛従周と戦い、連戦連勝し、その功績で馬軍指揮使となり、後にも戦功をあげて泰寧軍節度使となった（『九国志』巻二、『十国春秋』巻七）。

（四八）劉存は陳州（河南省淮陽県　『九国志』巻一）か、または唐州泌陽県（河南省唐河県　『資治通鑑』巻二六五）の出身で、武勇に優れ、行密が合淝に蜂起すると、陣営にしたがい、戦功をあげて、乾寧中に舒州（安徽省潜山県）団練使となった（『九国志』巻一、『十国春秋』巻六）。

（四九）趙匡凝は、山南東道節度使趙徳諲（蔡賊秦宗権の部下）の子であり、景福二年（八九三）に父親が亡くなると、その跡を継いで節度使となり、楊行密と好を通じたことで後梁の太祖の怒りを買い、天祐二年（九〇五）に攻められ、守りきれず、淮南の楊行密のもとに逃れた（『新唐書』巻一八六、『旧五代史』巻一七、『新五代史』巻四一、『十国春秋』巻八）。

（五〇）楊渥は行密の長子。彼に関する伝記は本書の他に『旧五代史』巻一三四、『十国春秋』巻二がある。

（五一）楊溥は行密の第四子。彼に関する伝記は本書の他に『十国春秋』巻三がある。

（補註一）この記事の年号は『資治通鑑』巻二五七・光啓三年の条に拠った。

（補註二）「取蘇・常・潤州」に関しては、清・周寿昌撰『五代史記纂誤補続』巻六・呉世家・楊行密の条では大順元年の出来事としている。確かに『資治通鑑』巻二五八・大順元年二月の条に楊行密が田頵・安仁義らに命じて常・潤州を攻めさせたこと、及び『新唐書』巻一八八・孫儒伝に大順元年に楊行密が潤州を取り、安仁義にこれを守らせ、李友に常州を守らせたことが記されている。そこで訳文に「大順元年」を付け加えた。

（補註三）「二年」に関しては、『五代史記纂誤補続』巻六・呉世家・楊行密の条では「龍紀は一年しかなく翌年正月に大順に改元されて二年がないこと、『新唐書』本紀・列伝、『資治通鑑』、『九国志』田頵伝にはすべて大順二年とあること」を理由に、また中華書局本『新五代史』巻六一・校勘記では、「龍紀は元年しかないことと『資治通鑑』巻二五八・大順二年五月の条で楊行密が李神福に命じて和・滁州を攻めさせたこと」を理由に、「大順二年」としている。周寿昌が指摘しているように、『新唐書』巻一〇・昭宗本紀の大順二年六月の条に「楊行密陥和・滁二州」、同書巻一八八・楊行密伝に「大順二年、［孫］儒屯溧水、循山構壁、行密遣李神福屯広徳、・・・儒将康旺取和州、安景思取滁州。神福撃降旺、逐景思、攻腰山屯、破之、禽儒将李弘章」、『九国志』とあり、二年が大順二年を指すことが確認できる。そこで訳文に「大順」の年号を付け加えた。

（補註四）「五年」に関して、清・呉蘭庭撰『五代史記纂誤補』巻四・呉世家・楊行密の条で、「乾寧五年は光化元年と重なり、この歳の八月に改元されていて、銭氏が蘇州を攻めたのは改元以前の出来事であり、蘇州に入城したのは改元後の九月のことであるから、五年は光化元年とするべきである」と述べている。この点の見解を『資治通鑑』巻二六一・光化元年の条で確認してみると、三月には、淮南の将周本が蘇州を救い、両浙の将顧全武がこれを撃ち破ろうとしたが、淮南の将秦裴は三千の兵でこれを守った記事があり、八月には改元の記事があり、九月には、顧全武が蘇州を攻めてこれを破った記事があることから、呉蘭庭の指摘が正しいことがわかる。そこで訳文では「五年」を「光化元年」に書き改めた。

（補註五）「友寧、梁太祖子也」とあるが、『新五代史』巻一三・梁家人伝には「朗王存、初与太祖俱従黄巣攻広州、存戦死。子友寧・友倫」及び『五代会要』巻一一・封建の条に「［梁開平］二年正月、追封皇従子友寧為安王」とあることから、友寧は兄の子であることがわかる。したがってこの文章には「兄」の字が欠落していると考えられる（宋・呉縝撰『五代史纂誤』巻上・梁臣伝・王景

仁三事の条、中華書局本『新五代史』巻六一・校勘記）。したがって訳文に「兄の」を付け加えた。

（補註六）「夾岡」の地名に関しては『中国歴史地名大辞典』（魏嵩山主編）に掲載されていないため、改めて関連史料を調べてみると、『宋史』巻九七・河渠志七・潤州水の条に「紹興七年、両浙転運使向子諲言、鎮江府呂城・夾岡、形勢高仰、因春夏不雨、官漕艱勤。・・・」、元・兪希魯撰『至順鎮江志』巻二・地理・斗門・丹陽県の条に「呂城・夾岡、宋紹興中置」、清・顧祖禹撰『読史芳輿紀要』巻二五・鎮江府・丹陽県の条に「夾岡、県北二十五里」とあることから、「夾岡」が鎮江府丹陽県の北二十五里にあったことがわかる。そして関連史料に見られる「呂城」の現所在地は、『中国歴史地名大辞典』によると、江蘇省丹陽市呂城鎮としている。このことから、「夾岡」の現所在地を江蘇省丹陽市北とした。

次に先の史料から「夾岡」に斗門（水門）が設置されたこと、同前『読史芳輿紀要』巻二五・鎮江府・丹陽県・夾岡の条に「亦曰大夾岡、下臨運河、故運河亦曰夾岡河也」、巻二十五・鎮江府・丹徒県・漕河の条に「夾岡河、即漕渠之別名也」とあることから、「夾岡」が漕河沿いにあったものと思われる。漕河は現在の京杭運河である。

原文

『新五代史』巻六一

嗚呼、自唐失其政、天下乗時、黥髡盗販、袞冕峨巍。呉暨南唐、姦豪竊攘。蜀険而富、漢険而貧。貧能自彊、富者先亡。閩陋荊蹙、楚開蛮服。剥剽弗堪、呉越其尤。牢牲視人、嶺蜑遭劉。百年之間、並起争雄、山川亦絶、風気不通。語曰、「清風興、群陰伏。日月出、爝火息」。故真人作而天下同。作「十国世家」。

呉世家第一

楊行密（本号）　子渥　隆演　溥（次号）

楊行密、字化源、廬州合淝人也。為人長大有力、能手百斤。唐乾符中、江・淮群盗起、行密以為盗見獲。刺史鄭棨奇其状貌、釈縛縦之。後応募為州兵、戍朔方、遷隊長。歳満戍還、而軍吏悪之、復使出戍。行密将行、過軍吏舎。軍吏陽為好言、問行密行何所欲。行密奮然曰、「惟少公頭爾」、即斬其首。携之而出、因起兵為乱、自号八営都知兵馬使。刺史郎幼復棄城走、行密遂拠廬州。

中和三年、唐即拝行密廬州刺史。淮南節度使高駢為畢師鐸所攻、駢表行密行軍司馬。行密率兵数千赴之、行至天長。師鐸已囚駢、召宣州秦彦入揚州、行密不得入、屯于蜀岡。師鐸兵衆数万撃行密、行密陽敗、棄営走。師鐸兵飢、乗勝争入営収軍実。行密反兵撃之、師鐸大敗、単騎走入城、遂殺高駢。行密聞駢死、縞軍向城哭三日。攻其西門、彦及師鐸奔于東塘。行密遂入揚州。

是時、城中倉廩空虚。飢民相殺而食、其夫婦・父子自相牽、就屠売之、屠者刲剔如羊豕。行密不能守、欲走。而蔡州秦宗権遣其弟宗衡掠地淮南。彦及師鐸還自東塘、与宗衡合。行密閉城不敢出。已而宗衡為偏将孫儒所殺。儒攻高郵破之、行密益懼。其客袁襲曰、「吾以新集之衆守空城。而諸将多駢旧人、非有厚恩素信力制而心服之也。今儒兵方盛、所攻必克。此諸将持両端因強弱択嚮背之時也。海陵鎮使高覇、駢之旧将、必不為吾用」。行密乃以軍令召覇。覇率其兵入広陵。行密欲使覇守天長。襲曰、「吾以疑覇而召之。其可復用乎。且吾能勝儒、無所用覇。不幸不勝、天長豈吾有哉。不如殺之、以并其衆」。行密因犒軍擒覇族之、得其兵数千。已而孫儒殺秦彦・畢師鐸、并其兵以攻行密。行密欲走海陵。襲曰、「海陵難守。而廬州吾旧治也、城廩完実、可為後図」。行密乃走廬州。久之、未知所嚮、問襲曰、「吾欲巻甲倍道、西取洪州可乎」。襲曰、「鍾伝新得江西、勢未可図。而秦彦之入広陵也、召池州刺史趙鍠委以宣州。今彦且死、鍠失所恃。而守宣州非其本志、且其為人非公敵、此可取也」。行密乃引兵攻鍠、戦于曷山、大敗之。進囲宣州。鍠棄城走、追及殺之。行密遂入宣州。

龍紀元年、唐拝行密宣州観察使。行密遣田頵・安仁義・李神福等攻浙西、取蘇・常・潤州。二年、取滁・和州。景福元年、取楚州。孫儒自逐行密、入広陵、久之、亦不能守。乃焚其城、殺民老疾以餉軍、駆其衆渡江。号五十万、以攻行密。諸将田頵・劉威等遇之輒敗。行密欲走銅官。其客戴友規、曰、「儒来気鋭而兵多。蓋其鋒不可当而可以挫、其衆不可敵而可久以敝之。若避而走、是就擒也」。劉威亦曰、「背城堅柵、可以不戦疲之」。行密以為然。久之、儒兵飢、又大疫、行密悉兵撃之。儒敗、被擒。将死、仰顧見威曰、「聞公為此策以敗我。使我有将如公者、其可敗邪」。行密収儒余兵数千、以皂衣蒙甲、号黒雲都、常以為親軍。

是歳、復入揚州。唐拝行密淮南節度使。乾寧二年、加検校太傅・同中書門下平章事。行密以田頵守宣州、安仁義守潤州。昇州刺史馮弘鐸来附。分遣頵等攻掠、自淮南以南・江以東諸州皆下之。進攻蘇州、擒其刺史成及。四年、兗州朱瑾奔于行密。初、瑾為梁所攻、求救于晋、晋遣李承嗣将勁騎数千助瑾、瑾敗、因与俱奔行密。行密兵皆江淮人、淮人軽弱。得瑾勁騎、而兵益振。

是歳、梁太祖遣葛従周・龐師古攻行密寿州、行密撃敗梁兵清口、殺師古。而従周収兵走、追至滸河、又大敗之。五年、銭鏐攻蘇州、及周本戦于白方湖、本敗、蘇州復入于越。天復元年、遣李神福攻越。戦臨安、大敗之、擒其将顧全武以帰。

二年、馮弘鐸叛、襲宣州、及田頵戦于曷山。弘鐸敗、将入于海。行密自至東塘邀之、使人謂弘鐸曰、「勝敗、用兵常事也。一戦之衄、何苦自棄于海島。吾府雖小、猶足容君」。弘鐸感泣。行密従十余騎、馳入其軍、以弘鐸為節度副使、以李神福代弘鐸為昇州刺史。

是歳、唐昭宗在岐、遣江淮宣諭使李儼拝行密東面諸道行営都統・検校太師・中書令、封呉王。三年、以李神福為鄂岳招討使以攻杜洪、荊南成汭救洪、神福敗之于君山。

梁兵攻青州、王師範来求救。遣王茂章救之、大敗梁兵、殺朱友寧。友寧、梁太祖子也。太祖大怒、自将以撃茂章。兵号二十万。復為茂章所敗。

田頵叛、襲昇州、執李神福妻子帰于宣州。行密召神福以討頵、頵遣其将王壇逆之。又遣神福書、以其妻子招之。神福曰、「吾以一卒従呉王起事、今為大将。忍背徳而顧妻子乎」。立斬其使以自絶。軍士聞之皆感奮。行至吉陽磯、頵執神福子承鼎以招之。神福叱左右射之、遂敗壇兵于吉陽。行密別遣臺濛撃頵。頵敗死。初、頵及安仁義・朱延寿等皆従行密起微賤、及江淮甫定、思漸休息。而三人者猛悍難制、頗欲除之、未有以発。天復二年、銭鏐為其将許再思等叛而囲之、再思召頵攻鏐。杭州垂克、而行密納鏐賂、命頵解兵。頵恨之。頵嘗計事広陵、行密諸将多就頵求賂、而獄吏亦有所求。頵怒曰、「吏欲我下獄也」。帰而遂謀叛。

仁義聞之亦叛、焚東塘以襲常州。常州刺史李遇出戦、望見仁義大罵之。仁義止其軍曰、「李遇乃敢辱我如此、其必有伏兵」。遂引軍却。而伏兵果発、追至夾岡、仁義植幟解甲而食、遇兵不敢追。仁義復入潤州。行密遣王茂章・李徳誠・米志誠等囲之。呉之軍中推朱瑾善槊、志誠善射、皆為第一。而仁義嘗以射自負、曰、「志誠之弓十、不当瑾槊之一。瑾槊之十、不当仁義弓之一」。毎与茂章等戦、必命中而後発、以此呉軍畏之、不敢近。行密亦招降之、仁義猶予未決。茂章乗其怠、穴地道而入、執仁義、斬于広陵。

延寿者、行密夫人朱氏之弟也。頵及仁義之将叛也、行密疑之、乃陽為目疾、毎接延寿使者、必錯乱其所見以示之。嘗行、故触柱而仆、朱夫人扶之、良久乃蘇。泣曰、「吾業成而喪其目。是天廃我也。吾児子皆不足以任事、得延寿付之。吾無恨矣」。夫人喜、急召延寿。延寿至、行密迎之寢門、刺殺之、出朱夫人以嫁之。

天祐二年、遣劉存攻鄂州、焚其城。城中兵突囲而出、諸将請急撃之。存曰、「撃之復入、則城愈固。聴其去、城可取也」。是日、城破、執杜洪、斬于広陵。九月、梁兵攻破襄州、趙匡凝奔于行密。十一月、行密卒。年五十四、謚曰武忠。子渥立。溥僭号、追尊行密為太祖武皇帝、陵曰興陵。